

主要登場人物

★本編オリジナルキャラクター

ラインハルト・フォン・ミューゼル

(Reinhard von Muse)

金髪と蒼氷色の瞳を持つ貴公子。本編の主人公。戦争の天才。本編は、彼が一〇歳から一八歳までの断続的なエピソードとなる。本編開始時には幼年学校一年生、終了時には少将。

ジークフリード・キルヒアイス

(Siegfried Kircheis)

ラインハルトの腹心であり親友。ラインハルトと並び、本編の主人公。『ルビーを溶かして染めたような』赤毛と、感じのいい青い目の少年。ラインハルトよりも二ヶ月だけ年上で、本編終了時には少佐。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

(Annerose Gräfin von Grünwald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。原作だけでは今ひとつ為人の掴み辛い女性ではあるが、単なる『囚われの姫君』というだけでない人物として、本編他では描こうとしている。

フリードリヒ四世

(Friedrich IV, Friedrich von Goldenbaum)

銀河帝国第三六代の皇帝。アンネローゼを後宮に入れる。まだ老人と呼ばれるべき年齢でないにもかかわらず、極めて困憊した老人の外見を持つ。本当に暗愚だったのか、賢帝になり得たけれども現状を諦観して無能皇帝の外見を決め込んだのか、ちよつと

分らないところのある皇帝。ただ、ラインハルトの登極に、この皇帝がある程度以上の働きをしたことは確かだと思われる。

リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

(Richard Vizegrat von Grimmelshausen)

原作外伝Ⅲで登場した老提督で、ヴァンフリート会戦でラインハルトの上官となった居眠り提督、あるいは、ひなたぼつこ提督。原作では死去とは書かれていないが、多分、外伝Ⅲの終わった辺りで亡くなったのだろう。結構、面白い爺さまだったし、生きていてくれれば、色々と働いてくれたと思うんですけど。中々味のある爺キャラクターでした。

ウルリッヒ・ケスラー

(Ulrich Kessler)

本編時点では、帝都管区憲兵隊の大佐。原作外伝Ⅲ『千億の星、千億の光』でも、グリンメルスハウゼン子爵の個人的な知遇を得て、帝都に留まっているとの記述があった。原作外伝Ⅲでは、ラインハルトとリュウネブルクとを仲裁する役と、グリンメルスハウゼン子爵から『グリンメルスハウゼン文書』を託される程度の役割しかもらっていないかったので、もう少し働いてもらうことにした。憲兵だけにある程度の捜査の権限も持っていただろうし、機材の利用もできるだろうということ。

リュウネブルク侯

(Klaus Fürst von Lichtenlade)

帝国国務尚書にして侯爵。フリードリヒ四世の側近。銀髪、驚を思わせる険しい眼光の老人で、一〇年以上にもわたり国務尚書として閣僚首座を務めた、老巧な宮廷政治家。

フローラ・フォン・ツィンメルマン★

(Flora Vizegrat von Zimmermann)

シュトレーメル伯爵の愛人の娘。伯爵家の正室に疎まれたことと、生来の呼吸器系疾患の持病のため、長く避寒地の別邸で育てられた。一七歳の時、ヴィンステインゲン侯爵の甥コンラディンとの縁組みのために帝都に呼び寄せられ、偶然の機会からキルヒアイスと知り合う。帝国貴族には珍しいストレーットの艶のある黒髪、大きな漆黒の瞳を持った白哲の少女。ラインハルトやキルヒアイスよりも一歳の年長。コンラディン・フォン・ヴィンステインゲンと結婚し、ツィンメルマン子爵夫人となる。

フロリアン・ゲルハルト・フォン・シュトルーメル★

(Florian Gerhard von Strömer)

フローラの異母弟にして、シュトルーメル伯爵セバステイアンの正室の息子。ラインハルト、キルヒアイスと幼年学校での同窓生。異母姉同様に黒髪と白い肌の美少年。日々に落剥の色を濃くしていくシュトルーメル伯爵家を立て直すため、帝国軍での昇進を望んで幼年学校から士官学校へと進む。ラインハルトはフロリアン・ゲルハルトに、将来の幕僚としての資質を見出しているが、キルヒアイスは必ずしも賛成していない。ちなみに「フロリアン」の名はゴルドンバウム王朝第五代皇帝カスパーの愛人となったカストラートの少年の名前から名付けた。

セバステイアン・フォン・シュトルーメル

(Sebastian Graf von Strömer)

フローラとフロリアン・ゲルハルトの父。シュトルーメル伯爵。フローラを疎んじる。奇しくもラインハルトの父と同名。

アルベルト・テニエス★

(Albert Tarnies)

フローラの爺^{じい}にして傳育役。ほとんど禿げ上がった頭部の耳脇に、既に完全に白髪に変じた頭髪の名残をまつわらせた痩身の男性。フローラの唯一の理解者であり味方である。フローラの結婚後、ツインメルマン子爵家の家宰となる。

コンラディン・フォン・ヴィンステインゲン★

(Konradin von Winstingen, Vizgraf von Zimmern)

ヴィンステインゲン侯爵の甥にして、ヴァルテンブルグ伯爵の姪の息子。『緩みきった輪郭の』大柄な少年として登場。拙書『赤鼻のルドルフ』ではラインハルトに膝の鞆帯を踏み切られかける。典型的な大貴族の『どら息子』であり、幼年学校教官のフラウ・ロートリンゲンには『ヴァルテンブルグ伯の姪^{ひめ}孫殿』などと呼ばれている。フローラの容姿に目をつけ、侯爵家の力で強引に彼女を妻に迎え、ツインメルマン子爵家を立てる。コンラディンは実在する名前で、「コ」と「ビ」を入れ替えた某人物のパロディではない。

ヴィンステインゲン侯爵★

(Fürst von Winstingen)

典型的な門閥貴族の一人として、猫屋銀英伝にしばしば登場する人物。拙書『リップシュタットの晩鐘』でラインハルト軍に一方的に撃破されて戦死し、没落する。

アルフレート・フォン・トゥルンヴァルト★

(Alfred von Thurnwald)

トゥルンヴァルト伯爵家の次男にして、技術中尉。帝国軍技術総監部『微細制御部』の主任研究員で、

指向性ゼツフル粒子や超指向性爆雷の制御に使うナノ・マシンの研究に実績を持つ。ラインハルトらが彼の名を耳にした時、アルフレートはすでに総監部を休職しており……

フラウ・ロートリンゲン★

(Maria Antonia Josefa Joana Gräfin von Lothringen)

ロートリンゲン伯爵家当主。ラインハルトが幼年学校一年生の時の臨時数学教官。既に七〇歳を超えた、すでにすっかり銀髪に変わった金髪の、端正な老貴婦人。実はマリィンドルフ伯爵家の血縁者であり、望まれてロートリンゲン伯爵家を嗣ぐ。猫屋銀英伝の短編に時々登場願っている。

ヴェストパーレ男爵夫人

(Magdalena Freiherrin von Westphale)

アンネローゼの数少ない宮廷での友人で、ヴェストパーレ男爵家当主。黒髪の美女だが、後にキルヒアイスには『黒髪の女性は嫌いです』などと冗談とも真剣ともつかぬ台詞を吐かせた張本人（かも知れない）。多くの芸術家の卵を後援する。

アントン・ヒルマー・フォン・シャフト

(Anton Hilmer von Schaft)

帝国軍技術総監部総監。技術大将で、指向性ゼツフル粒子や移動要塞の技術を『開発した』とされるが、部下の功績を奪って自分のものにしただけではないかという気がする。